



北相模総守護社
亀ヶ池八幡宮

龜ヶ池



創刊号 [平成18年8月1日発行]

発行／亀ヶ池八幡宮社務所
〒229-1123 神奈川県相模原市上溝1678
TEL.042-751-1138 FAX.042-757-3811
URL <http://www.kamegaike.jp>
E-mail: info@kamegaike.jp



御由緒



御祭神は応神天皇(菅田別命)である。御創建は不詳であるが、康永二年(一三四三年)社殿を再建し、文禄・明暦・延宝・宝暦にそれぞれ改築し、慶安二年徳川幕府より社領七石の朱印地を賜った。

昭和四十三年二月二十四日付にて神奈川県神社庁より献幣使参向神社に指定され、神社本庁より幣帛料を賜り例祭(九月)が肅行される。創建後、植樹された御社殿前の御神木は、夫婦いちようとされ、縁結びの神様として古くより県北の人々にその御神徳は崇められ尊ばれている。

平成四年五月第十二回還暦大祭(六十年に一度の祭)を記念し、大鳥居(社額)は白井永三元神社本庁総長揮毫、他境内整備並びに、平成七年七月、亀八七福神、亀八伏見稲荷神社を遷座した。

平成の御大典記念事業として、平成六年十月には参集殿、平成九年五月に大狛犬、平成十三年六月両翼殿備える神楽殿、平成十五年元旦、交通安全祈願のゴールド神社がそれぞれ竣工され、名実ともに北相模の総鎮守としての風格が整った。

「社報亀ヶ池」発刊のご挨拶

宮司 根岸信行



先ず以て皇室の弥栄と神宮の愈々の御隆盛を謹んでお祈り申し上げます。

早くも半年を経過いたしました。氏子崇敬者皆様におかれましては、益々ご健勝にご活躍のこととお慶び存じ上げます。当宮のご創建は不詳でございますが、八百

社報発刊に寄せて

責任総代 小林 亮



根岸宮司の永年の懸案であった社報の発刊が実現されることになりました。神社の責任総代

として欣快の極みであり、衷心より祝福いたします。

相模原市は平成十九年三月には津久井四町との合併により人口七十万を擁する近代都市としての発展が約束されています。

現在、市内の四十社の中心的な役割を

余年の歴史を積み重ねていと存じます。さて、今年の三月、相模原市は津久井郡の相模湖町並びに津久井町の二町と合併し、人口七〇余万人、面積は横浜に次ぐ二番目の大都市・新相模原市が誕生いたしました。県北のシンボル都市として将来の飛躍が期待されます。さて、神社界は国民ごぞつて本宗と仰ぎ奉る伊勢神宮が、来る平成二十五年に第六十二回神宮式年遷宮を斎行いたし

ます。天皇陛下の御治定を仰ぎ、今年五月五日御用材を神宮へ運び入れる第二回お木曳き行事が行われ、いよいよ遷宮準備が本格的に始まりました。

更に天皇家におかれましては、秋篠宮妃殿下がご懐妊遊ばされ、本年九月にはお子様のご誕生が期待されます。この慶賀の御代に当宮念願の社報が発刊できることは大変喜ばしく存じます。氏子崇敬者皆様方の篤いご支援ご協力を賜り、皆様方から愛され親しまれる社報を刊行したいと存じます。くれぐれもよろしくお願ひ申し上げ、社報発刊のご挨拶といたします。

共感を呼び、その積み重ねが現在の亀ヶ池八幡宮発展の礎を作り上げたものがあります。

「年々歳々人同じからず」。亀ヶ池八幡宮に御奉仕する神職、総代、世話人、氏子は変化しますが、神社は永遠であります。

新しく誕生する七十万都市相模原市の名実ともに二之宮としての亀ヶ池八幡宮の弥栄のために、宮司を中心に総代、世話人、氏子崇敬者心を併せて御奉仕に邁進することを期したいと思います。

氏子崇敬者皆様様の益々の平安と発展を祈念し、発刊の祝辞といたします。



暑中お見舞い 申し上げます

宮司	根岸 信行	加藤 光明
権補宜	根岸 浩行	山田 昌士
権補宜	根岸 千恵子	金指 幹夫
権補宜	根岸 満理	松本 茂
権補宜	山田 一臣	無藤 一男
責任役員	小林 亮	村上 亨
責任役員	練間 清崇	熊坂 弘次
責任役員	竹内 一郎	佐藤 林作
責任役員	清水 亨	井上 七五三
責任役員	鈴木 正彦	北島 捷一
責任役員	米山 侃	関田 崇成
責任役員	小俣 旭	関田 博文
責任役員	吉川 和宏	清水 恵二
責任役員	中村 善一	金子 兼吉
責任役員	門倉 國政	金子 俊次
責任役員	杉本 栄治	大野 寛次
責任役員	鈴木 敬信	鈴木 武雄
責任役員	上島 茂三郎	根岸 良郎
責任役員	吉川 佳一	荒木 茂
責任役員		佐藤 正義
責任役員		田中正志